

第1回国際シンポジウム（大阪）記録

<第1部> ドイツにおける市民文化に基づく地区更新

日時：2010年8月22日（日） 10.30～12.00

場所：大阪市立住まい情報センター ホール

発表者：

大場 茂明（研究プロジェクト代表・大阪市立大学教授）

ディルク・シューベルト（ハンブルク・ハーフェンシティ大学教授）

ハンス・ヨアヒム・レスナー（steg 代表）

司会：久堀 裕朗（大阪市立大学准教授）

久堀：おはようございます。それではお時間になりましたので、平成22年度大阪市立大学都市問題研究プロジェクト「住みごたえのある町をつくるー大阪・ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメント」国際シンポジウムとして、「イベント・下町・エリアマネジメントー大阪・ハンブルクの取り組みからー」と題しまして、始めたいと思います。私、午前中の司会を務めます大阪市大文学研究科の久堀と申します、よろしく願いいたします。

まず、プログラムについて、私の方から簡単に説明したいと思います。午前中の第一部はドイツにおける市民文化に基づく地区更新と題しまして、主にドイツにおける都市更新の歴史と現状についてお話しいただきます。まずはじめに、本研究プロジェクト代表の大阪市立大学文学研究科教授の大場茂明先生から日本とドイツの共同研究の背景と目的、本シンポジウムの構成など、今回のシンポジウムの趣旨説明をいたします。それに続きまして、ハーフェンシティ大学教授のディルク・シューベルト氏がドイツ及びハンブルクにおける都市更新について、その歴史的発展過程など、事業の概要をご報告いたします。続きまして、Steg 代表、Steg とはハンブルク都市更新・都市開発会社のことですが、Steg の代表のハンス・ヨアヒム・レスナー氏にドイツにおける都市更新の現況について、ハンブルクで Steg が行った事業を中心に、地区マネジメント、社会責任、住民参加、資金調達、アクターのネットワーク、施策の持続可能性などについてご報告をいただきます。最後に時間がありましたら簡単に第一部のまとめをするという形でございます。それでは早速ですけれども、本シンポジウムの趣旨説明を大場先生からお願いいたします。

大場：皆さん、おはようございます。本日はお暑い中、午前中よりお集まりいただきまして、ありがとうございます。そうしましたら、簡単にですね、このシンポジウム全体のバックグラウンドになることを私の方から説明させていただきます。

この研究プロジェクト自体は昨年度から3年間の予定で始めているわけですが、そのの

そもその動機はこのスライドには写しこんではいないんですが、最近、日本・ドイツに限らず欧米諸国で顕著なわけですが、人口の減少ですとか、あるいは高齢化によって未利用の土地、あるいは住宅の空き家が増えているということを総じて都市の縮退現象、シュリンキングシティ現象と申し上げるわけですが、それに伴う対策が近年問題になっています。このシンポジウムの趣旨は、いろんな形での創造的縮小、つまり縮退都市に対する施策の中で、特に市区の活性化、都市全体というよりもその中の市区レベルでの活性化の施策をとることで、どのようなことが可能性として考えられるかということ、日本とドイツ、具体的には姉妹都市でありますハンブルクと大阪の比較によって考えていきたいと思っております。

ここに書いておりますように、ハンブルクと大阪を比較する意味ですが、一つは大きく共通性ということでもとめられるわけですが、言うまでもなく歴史的にはそれぞれが国内有数の商業都市、港湾都市として発展してまいりましたし、市民文化をリードするという存在でもありましたし、そして近年の傾向といたしましては、どちらの都市も人口が、一時は減少していったのですが、最近では人口の回復傾向にあります。それは場所によってはジェントリフィケーションという現象の兆しなのかもしれません。これは、これから日本・ドイツの報告の中でそういったところも考えていきたいと思っておりますが、そもそも地区活性化の話の中でポイントになりますのは従来の施策ではなくて、商店街の衰退ですとか、住宅の老朽化を何とかしなければならぬという問題があるわけですが、大規模な再開発に頼らずに、既成の市街地、特に下町の魅力を再発見するといった必要を私たちは感じております。

その中でドイツ・ハンブルクを例に挙げるのには理由がございまして、それは単に先ほど申し上げました共通性ですとか、姉妹都市であるということではなくて、ハンブルクがドイツにおける衰退地区再生プログラムの先駆けとして豊富な事業体験、経験を持っている。今日は実際に事業に関わった皆さんにハンブルクからお越しいただいているわけですが、そういう面でも比較対象として非常に最適であろうと。特にこれからハンブルク側の事例として出てきますザンクト・パウリという地区をはじめとして市内のインナーシティでの事業展開により、すでに新たな都市居住の魅力を創り出すことに成果を上げています。このシンポジウムの一つのキーワードとして、”Szenenviertel”(シュツェーネンフィアテル)というドイツ語の単語があるんですが、これは若者に好まれるような、日本語ではありませんが、「クールな地区」ということで通じるそうですが、そういったものの取り組みも含めて、事例に直接関わったメンバーの皆さんをお招きして、先進事例を学ぶという意義が一つ大きなものとしてあります。したがって、日独の比較と申しまして両方の事例をパラレルに比較するという趣旨ではありません。

で、「イベント・下町・エリアマネジメント」というタイトルの説明をいたしますけど、これは共同研究の事例地域がいわゆる下町、既成市街地内の商工住の混合地域を舞台にし、そしてイベントという言葉を盛り込んでいるのは、「地域資源」というのもキーワードな

んですが、いわゆる目に見えるような記念物というような地域資源だけではなくて、無形のもの、例えばお祭りですとか賑わいだとか、そういったものを活用しながら、様々なアクターによる主体的な文化活動、エリアマネジメント活動を基に、そこにございますように、「市民文化を基礎においた住みごたえのあるまちづくりモデル」を提案していきたい。それがこの共同研究の目的でもありますし、それに向けて本日は日独両方からご報告いただいて、午前・午後と分けて、午後には意見交換、パネルディスカッションをしてまいりたいと思っております。私の方からの、このシンポジウムの趣旨説明は以上です。

久堀：それでは続きまして、ハーフェンシティ大学教授のディルク・シューベルト氏に「地区開発と住みごたえ、保全と増価とを結ぶ都市更新」としてお話をいただきます。よろしくお願いいたします。

シューベルト：大場先生とご臨席の皆様がた、それと同僚の方々、本日は大阪の方にお招きいただきまして、都市開発について意見交換できることを大変うれしく、また光栄に思っております。本日、大阪とハンブルクは姉妹都市でありますけども、その姉妹都市友好のさらに深める一歩として役に立てればと思っております。それと、こちらのハンブルクのハーフェンシティ大学と大阪市立大学が今回の意見交換を機に今後も意見交換を続けていけることができましたらとても幸いだと考えております。都市の近代化、あるいは再開発と住みやすさ住み心地の良さといいますと、ドイツ語の響きとしては、いきなり住み心地の良さといいますと少しネガティブなタッチがあります。これは心地よさといいますと、どうしても古臭いイメージがありますけども、今回言っているのは都市の近代化が、ある時期において非常に進みまして、住みにくくなりましたが、逆に近代的でありながら心地よさ。最近では心地よさという言葉がいい意味で使われております。心地よさという言葉は”Gemütrichkeit”という言葉ですが、もともとは気分という名詞から派生した言葉で、基本的には何か起きたとき、あるいはあるまちに行ったとき、何かを見たときに、それを主観的にどう感じるか、そういうものであります。その Gemütrichkeit というドイツ語の単語を英語と比較しますと、これに一对一で対応する言葉がなくって、場面に応じて会う言葉を探していくという言葉であります。それを言葉で表すと、まず喜び、あるいは心温かさ、心地よさ、それから守られているなという感じ、そういういい意味の言葉をすべて含んだ言葉が Gemütrichkeit という言葉です。争いもない、心配もない、興奮することもない、ストレスもない、そういう状態でもあります。その Gemütrichkeit という言葉は文学でもよく使われるんですが、軽く使ってしまうと非常に軽い言葉なんですが、よく考えると非常に幅広い意味があって、別の意味のある言葉でもあります。都市開発に対して、Gemütrichkeit という言葉を使う、あるいは都市の中のある地区の開発に対して使う。これは非常にいい意味での解釈で我々は使っております。

で、ハンブルクのこれまで行ってきた都市開発を簡単に振り返ってみて、実際に何をやってきて、何がどう変わってきたかという事例を挙げてみたいと思います。今から 30 年ほど前になりますが、その当時の土地開発、都市の刷新の議論は、例えば Hafenstraße

というザンクト・パウリ地区にある通りなんです、このあたり当時は非常に古くさくて遅れているということが言われておりました、例えば家にしてももっと近代的な団地を作って、未来を先取りした方がいいんじゃないかという議論が政治家も加わって行われておりました。大阪もそうかもわかりませんが、町を刷新する場合、再開発を行う場合、古い建物、伝統的な建物をどこまで残すかというのが議論のテーマになります。これはハンブルクのエッペンドルフという地区の例ですが、先ほども言いましたように、古い建物を壊すのではなく、それを改修するという形で、その姿をとどめながら近代化を行った結果、結果としてこういうような街の姿が生まれることになりました。で、ザンクト・パウリ地区とか中央駅のあたりは、古いものは逆にかなり潰して、新しいものが建った地区であります。ちょうど今から 40 年ほど前は、古いものを全部いったん無くして、更地にしたらうでこういう街を作ってみたらどうか、高層ビルが立ち並ぶような街という構想が主流を占めておりましたが、幸いにそうはならず済んだわけです。

いわゆる街を再開発するときに、古い建物とどう取り組んでいくのか、というのを今から 20 年、30 年、40 年のスパンで見えていきますと、その当時の人々、あるいは今の我々の考え方、というか価値観そのものが変わっているのが非常によくわかります。当時の近代化と現在の近代化。古い建物をつぶすのか、あるいは改修して残すのか、という意味で価値観が変わっていることが非常に顕著に表れております。例えば 80 年代の初めのころに、この時はドイツをはじめヨーロッパ全体で様々なプロジェクト、あるいは様々なイニシアティブというのが進んでいった時代であります。これを見てよくわかるように、ドイツの近代化に非常に大事だったのは、連邦があり、州があり、市があり、市の中に地域がある。そして地域の特性を残したものを重要視している考え方です。ハンブルクで基本的に近代化が話題に上がったのは 1892 年、100 年以上前の話しで、それから戦後の改修あるいは街の近代化、ということで連邦がつくったプログラムもありましたし、ハンブルクのプログラムもありました。それらがうまくバランスをとれて今の形になっているわけです。今話しましたように、ハンブルクには都市の近代化について長い歴史がありまして、様々なプログラムを行ってきたわけですが、その中でも特徴的というかハンブルクがずっと守ってきたというのは、まず街を全体に近代化するのではなく地区に的を絞ってコンパクトな形でやってきたということが特徴的であります。今の近代化、あるいは再開発を言うときにアクティブな街の地区の活性化、刷新あるいは再開発という呼び方をしますが、これにも非常に様々な対策や方策がありまして、これが去年の 2009 年に一つにまとめられました。その中には特徴的なものというモノは全て包括的に考えるということで、それはどういうことかという、社会的な要素もあるし、経済的な要素、エコロジーの要素もある。そういうモノすべてがバランスよく取れた形で街の刷新を行っていくことであります。いくつかキーワードを挙げていきますと、住居に関しましては古いものをつぶして新しいものを建てるわけではなく、古いものを改修しながら残していく形。それから商工業をどんどん取り入れてまちの活性化を行う。社会面におきましては、街の中に

ある緊張感を緩和していく方向に持っていく。それと教育面でも充実したものを行っていくのと、最終的には市民イニシアティブが活動できる場を提供していく、そういうものがキーワードとしてあげられます。

このある近代化におきまして二つのパターンがあるんですが、まず最初のパターンとして、テーマを決めた都市開発ということで、これは長くても4年をめどにやるんですが、あるテーマがこの地区をこういう風にしようということが決まって、それに向かって関係省庁が協力しながらやっていくというのがテーマ開発であります。これは先ほどのテーマ地区に対しまして、いわゆる開発地区と呼ばれるものですが、内容的には複雑になっておりまして、包括的に町のある地区を開発していく、そういう意味で開発地区と呼ばれるプログラムであります。ハンブルクの場合であると、先ほどの開発地区が6か所を超えてまして、テーマ地区っていうのが5か所あります。それが行われた結果、地区の価値観、あるいは地区の価値が向上しております。これを簡単にまとめますと、役所なり管理の仕方自体をもう少しコンパクトにシュリンクするという方向にあります。これは20年、30年前の頃にはなかったんですが、当時は開発するということこういう風にするべきであるという形でいきましたけども、現在では長いプロセスの一部と考えながら、住民参加のもとに行いながら結果も少しずつ修正していくという傾向にあります。それと一つ言えるのは包括的な都市の地区を作っていくことでありまして、そのためには機能的な地区マネジメントが必要で、それと公金は減る一方ですので、目的を絞った形の効率的な使い方というのも要求されます。キーワードとして最初に挙げられるのは、革新、刷新、再開発、ということは常に学習が続いていくプロセスであり、そのプロセスを実行しながらそこで学んだことを次々に補完していくという考え方です。そして建物をできるだけ壊さない、残すというのが非常に優先されまして、壊してしまうというのはほとんどタブーの状態です。昔と違い、町のある広い地区を革新するのではなく、もっと狭い地区に絞ってコンパクトな形で再開発を進めるという形です。

それと、昔は専門家だけがやっていたんですが、今度は専門家が提案をする形で、市民参加型で市民が自分たちのことを考えながら、決めながら専門家と共にやっていくというのが現在の形です。昔と違いまして、ここは商業地区、ここは工業地区というのではなくて、住があり商があり工、そういうものがうまく混ざった形のまちづくり、地区作りであります。その時に非常に重要なのは雇用の確保でありまして、地元住民が働ける場所を十分に確保していくことが非常に重要であります。昔の都市の再開発は終わりがなく、底の無い樽のような感じで、公金をどんどんつぎ込んでもきりがなくという形でしたけども、そうではなくてある程度のところで終わるような形にしていく、そして町はこれだけのことをしたということがはっきり分かる形にしてあげるということでもあります。ドイツの場合は考え方として今あるまちの姿、景観を維持するという考え方が非常に強いので、まちの景観を変えるときに、どこまでそれを守れるのか、どこまで変えるのか、そのバランスをどこでとるのかということが非常に議論が活発になされております。ただ公金を投資す

るということになると、日本もそうかと思いますが減少傾向にありますので、それが有効に使われているかどうか、そのチェック機能、コントロール、査定、オーデット(Audit)というモノが非常に大切になってまいります。

これが今までお話してきました、活性化、あるいは再開発の枠組みのプログラムですが、一つには開発地区があったり、テーマ地区があったということですが、市民が役所が専門家がそれぞれがどう協力し合ってそれをやっていくのかという点が非常に重要な点であります。ある地区を新しく再開発したいといった時に、その地区にある家が守られるのか、その地区の共益が守られるのか、社会構造が守られるのかということ等を常に考慮しながら、やる価値があるのかということが議論されます。そのプランニングの手法としましては、戦略的な手段をきっちりと立てて、お金も十分用意して、役所がやること、市民がやること、専門家がやることという風に棲み分けをはっきりして、お互いが無駄のないようにするということがまず大切です。先ほどもいいましたが、都市開発を行うときに絶対に結果がこうであるべきだというのではなくて、開発を行いながら結果がこうであってもいいのではないかという、柔軟性を残しながら先へ進んでいくということ。それによって、ハンブルクは人口が拡大傾向にあるまちなんです、変わっていくと思います。ハンブルクでもある時期に開発が急速にすすんで、その結果このような団地ができましたけども、この中でどこが創造的であって、どこが活性化されているのかと思ってしまう。ここにありますように、開発というのは道は一つではなく、いろんな道があるんですが、この道を行けば正しいのかそうではないのかということではなくて、常に選択肢はあってそれを進めながら考えながら、それを流動的に変えていくという姿勢が必要だと思います。これは今までの開発で得られた知識をまとめた成功の要因ですけど、まずはまちに合ったコンセプトを作ること、それから情報を広める口コミのようなものを使う、あるいはそのマネジメントがしっかりしていて、プロのマネジメントができるということ、そのような10項目を挙げております。

もうひとつ最初に話が戻って **Gemütlichkeit**、いわゆる居心地、住み心地の良い町なんです、最近住居のルネッサンス、いわゆる昔に帰ろうという動きが生まれてきております。これは簡単に言いますと、ぎすぎすした仕事の世界、グローバル化が進む現代の対極にあるものでして、例えば家にいて自分が守られているという感覚、ほっとできる感覚、あるいはせかせかしないでゆったりとできる感覚。言ってみれば最近文学者なんかは「スローライフ」という言葉を使いますが、そういう方向に現在は価値観が向かっていると思います。これを英語で言うと「グローバルプレイヤーであり、同時にローカルユーザーである」ということで、これはどういうことかということ、まちにしながら非常にグローバルで近代的ではあるんだけど、自分自身がすべてを決められる。心地よさもありながら快適さ、機能さもあるということでもあります。私が今回の話を準備するときに、日本の資料も若干目を通しましたが、そのなかで「まちづくり」という言葉がありましたが、それが意味するのはおそらく地元市民が自分たちのことは自分たちで決める、あるいは市民参

加型の考え方であると思います。これはいわば私が言っている心地よさ、住み心地のよいという *Gemütlichkeit* という言葉に対応するのかなと思います。ご清聴ありがとうございました。

久堀：:それでは続きまして、Steg 代表ハンス・ヨアヒム・レスナー氏に「ドイツにおける再開発事業の担い手の現状と課題—文化アイデンティティは単なる感情の産物か、それとも具体的な欲求か—」ということでお話をいただきます。

レスナー：大場先生をはじめご臨席の皆様、今回大阪にお招きいたしましたことに感謝いたします。いまシューベルト先生から、都市開発の概略についてお話をいただきましたので、この場を借りて私の方からは具体的な話をしてみたいと思います。

まず話に入る前に私たちの会社を簡単に紹介いたしますと、1990 年にハンブルク市が作った公社でありますけども、2003 年に民営化されまして現在 70 人ほどが働いております。70 人といいますが、非常に分野の異なる人間の集まりで建築家もいれば経済の専門家、不動産屋や PR の専門家あるいは都市計画家などが集まった集団で、現在ハンブルク市内に 8 か所の事務所を抱えております。これを私たちの会社の構造ということで、4 つの大きな部署がありまして、まずは不動産部署、それから都市の中の地区を管理するマネジメント部署、建築・都市開発の部署、それと最終的には不動産の開発部署の 4 つの部署から会社は構成されております。これは市から委託された改修なんですけど、1200 軒が住居でありまして、300 軒が商店や工場であります。本来の私たちの業務は、古くなった建物を改修する。その時に市民の意見を取り入れて、地区の開発の意味も含めた意味での改修を行ってまいりました。その改修する建物はどれを見ても大体 100 年以上たった建物であります。どうしても維持ができないというモノに関しては新しいものを作ったりもしますが、例えばその例がこれです。新築っていうのは我々にとっては本当に例外的なもので、我々の仕事のメインはあくまでも古い建物の改修であります。

問題点が一つここでありまして、古いものを改修するコスト、新築にかかるコストこれはほぼ同じなんですけど、賃貸にしたときに古いものでありますと、家賃は新築の半分しか取れない。そうするとその半分はどうしても住む人が持たなければいけないという話になります。これを見ますと 120 年たった建物ですが、これを改修するのは新築する場合の倍くらいの値段がかかります。当然改修の間はここに住めませんので、別のところに住んで改修が終わったらまた戻ってくるということになります。これを見るとよくわかるように、改修する前はとても住みたいと思うものではないし、改修後も特にそんなきれいになっただけではないんですが、大切なのは外壁ではなくてその中身で、あと 100 年住めるようなものになっています。これは「赤い植物」と言われているような、インディペンデンス・グループが住んでいるようなところなんですけど、その一つの例です。先ほどの大場先生のお話にもありました、ジェントリフィケーションの例として、これを最近の傾向としてあげているわけがあります。これを実際に改修している例なんですけど、手前のところを見ますと、通りのところにカフェができて、そこで夏にはみんなが集まることができて、

右側のところには文化センターみたいなどことができました。改修でかなり町の景観が変わった地区という例で挙げております。ハンブルクに残っている非常に古い、労働者階級が住んでいたアパートの残骸とは言いませんが、そういう例であります。この周りをみてみますと、新しい建物が取り囲んでいるような感じで、非常に古くさ感じがする建物であります。その一年前に芸術家が集まってきて、ここに住み始めたわけであります。そこに住みつけた芸術家と話合しまして、公金を使ってここをきれいに修復しようという話が進んでいったわけであります。ここも先ほどと同じようにスクラップして新しいものを建てることに比べれば、修復は倍のお金がかかります。

二倍かかるものをなぜ残すのかというのが今回の非常に大きなテーマにありまして、これを残すことによって文化を守ることができるということがあります。いわゆる若者を中心に芸術家やアーティストと呼ばれる人が、ハンブルクに残った伝統、文化を維持することによって守ることができるわけであります。ハンブルクも大阪と同じように戦時中にかなり空襲でやられていますから、戦後建った家を除いて、昔から建っていて残っている家というのは少ないです。いわゆる伝統と歴史のある建物、いわば文化財の保護という発想ですが、こういうものと今後どう付き合っていけばいいのかという問題が生じてきます。実際に先ほども言いましたように、そういうものを残すというのは、潰して建てるよりも余計にお金がかかるわけですし、しかも公的なお金を使うわけですね。それが街の伝統、文化を残すこととして許されるのかということでもあります。それが最近の傾向としまして、伝統あるものを文化財として保護していくというのは公共団体の義務であるという考え方が主流になっております。

この建物は、昔は牛を殺した屠殺場の古い建物なんですけど、先ほど言いましたように文化財に対する考え方が変わっておりまして、ザンクト・パウリ地区にあるところですけども、これは修復の一つの例であります。15年前はこれをつぶして、新しいマンションを建てようという話が出ておりました。これもザンクト・パウリ地区にある港湾病院の建物でしたが、これも当時は壊してマンションと商業地区を作ろうという話がありました。ザンクト・パウリの地区の住民がこれの取り壊しに対してデモ行動をしまして、その結果我々の会社 **Steg** がこれを修復して、社会健康センターという形で修復され、この建物は残っております。

これによってよくわかると思うんですが、市に課せられた課題というのは、新しい建物を作って新しい何かをするということではなくて、古い建物を改修して用途を改修することによって市が必要とする公共の建物を作ることができるということが市の課題とされています。先ほどの港湾病院は、現在は健康センターになってまして、ここは開業医さんや健康関連の企業が入っております。これは市が補助金を出しているわけではなくて、民営で十分にやっていっております。こういう形になっております。ただし古い建物を修復するといっても、特定の部分に関しては、新しいものを増築したり改築したりする必要はもちろんあります。本来は、我々は古い建物を新しく改修するだけだったのが、それを

行うことによって、それを取り巻く地区、周りの環境、あるいは地区のコンセプト、まちのイメージアップ、それらすべてを総括的にするというのが我々の課題となっています。

次に申し上げるのが地区の活性化でして、その地区の活性化のためにいろいろなコンセプトなりプログラムを考える、それが我々の会社に2~6人が専門的に従事しております。一番なかでも難しいのは、ある地区の人々の意見を反映させる、市民参加型を本当に行っていくことが、本当に難しい課題であります。一つの街の地区といいましても、2000ha あったりする場合もあり、10万人くらいが住んでいるところもありますし、そこで町のコンセプトを作って、しかも地元市民の意見を取り入れて参加する、これがいかに難しいかがよくお分かりいただけることと思います。これは一つの学校との協力の例ですが、学校をその地区で活性化するという事だったんですけども、学校だけではなくて地域にある様々な協会や機関であったり、企業であったり、その町の活性化、イメージ作りをどこまでできるか、関係あるものすべて市民参加の形なんで、これも非常に骨の折れる仕事でした。どういう形ですかということ、地区にはいろいろなグループなり市民団体がありますが、これをネットワーク化してその地区の持っている本来の活力をさらに活性化していく、そういう形で行っていきます。そのためには非常にたくさんのノウハウが必要で、プランニングがしっかりしていて、いついつまでに、どこまでできるだろうという見通しをしっかりと立てないと、それはもちろんできないことでもあります。公的機関の協力ももちろん必要でありまして、今左の写真が右に変わったわけでありまして。それと地区の活性化を行うためにはマーケティングをしないといけないでしょうし、商業の活性化も必要であったり、イベント、スポーツをやったり、お祭りをやったり、会議をしたり、そういうことも我々の最近の課題になっております。ザンクト・パウリ地区はハンブルク・メッセ（見本市会場）に隣接するところにありまして、メッセが大きくなってきておりますので、今後メッセをどう取り入れていくかという話を地区住民と進めております。

その当時はまちがどれほど不潔であったか、ということを示すための話であります。ハンブルクの場合は、残念ながら市民が街をきれいにしようとする美化意識があまりないというのが分かります。それを見ると、大阪などは、私からみれば、街の美化という点では非常にうらやましい点でありますし、そういう意識を改革していくというのも我々の業務の一つであります。これを見ていただくとよくわかると思いますが、まちの美化がいかに重要であるかというのが分かるかと思えます。でも、それはまちのイメージ作りには非常に大切なものでありますから、どうしても不可欠なものであります。これは残念な話なんですけど、これに見られるように町中に落書きがあったり、景観を損ねているということがあり、これも我々の重要な課題であります。これは、まちの美化を訴える広告でありまして、いわゆる公共運動でもあります。ストリート・フェスティバルなんかを行うことで、地元住民の街の美化意識を高めていこうというPR活動でもあります。いわゆる各都市の地区ごとに重点項目を決めて、それをやりまして、例えばキーワードとしてあげられるのが、ファッション、モードというものであります。それがファッションであったり、音楽

であったり、芸術である。そういうものがまちの売り物になるとまちのイメージが良くなりますし、そこに文化というものが発生してまいります。これは例えば古い建物を修復した例で、こういう照明で美しくすることで人が集まってきて、あんな汚いところがこうなったんだという意味で、町のイメージアップに非常に戦略的に役にたっていると思います。

これは、あくまでも建造物というモノとして捉えるのではなく、まちの地区、人が住んでいて生活がある。そういうものとしてとらえる考え方に依拠するものであります。ここ数年間、ジェントリフィケーションというものは非常にうまくいっていると思います。ここ数年、ドイツ特にハンブルクもそうですが、意識改革というのが行われて、例えば昔は街の中心部ってこのように汚くて住たくなかったんですが、このように変わったことでいいなという意識が変わって、中心に戻ってくる人が増えてきています。今度は、逆に将来的な課題としては、みんなが住みたいというところにみんなが集中しないようにどう抑制するかという問題が出てきます。そのためには政治的決定が必要で、そこに移り住んでくることによって今まで住んでいた人たちが追い出されないようにするという、政治的措置も取られています。これで我々の課題が非常に多岐にわたること、あるいは我々が多岐にわたる取り組みをしてきたことがよく分かると思うんですが、建物に関して取り組むだけでなく、そこに住んでいるひと、あるいはその内容である者に対して取り組んでいくことがいかに重要かということがお分かり頂けたかと思います。ただし、課題をいっぺんに背負い込んでしまうと、このロバのように宙に浮いてしまって一歩も進めないということがあると思いますので、我々も注意深くひとつひとつを順番にやっていくしかないと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

久堀：以上、第一部は主にドイツ側の都市更新の歴史と現状についてお二方にお話をいただきました。それでは最後にまとめとして、プロジェクト代表の大場先生より、まとめのコメントをいただきたいと思います。

大場：時間の関係でひょっとしたら簡単なまとめに入れられないんじゃないかと思っていましたが、予想外に早めに講演を終わっていただきましたので、簡単な午前中のまとめと申しますか、本来ご案内したところで申しますと、文化をまちづくりにどのように生かすかを日独でしましょうということが午前中のテーマだったと思うんですが、時間の関係で日本の方はほとんど触れずに、これは第二部に回しまして、第一部の構成といたしまして、まずはシューベルト先生からドイツにおける都市更新の歴史、それはですね、途中で年表を示されたように確かに 80 年代の初め位に大きな変化があるんですね。それまでのドイツに限らずとも、スクラップ&ビルト。それは日本もそうなんですが、そういったものから徐々に穏やかに、つまり一気に変えるのではなくて少しずつ地域を変えていく。そしてそれが単に物的な更新だけではなくて、レスナーさんから具体的なハンブルクの **Steg** の活動を通じまして、いかに都市更新というものが、あるいは地域の更新が非常に多岐にわたるのか。それは一方で、別の側面から見ると、あるハードを作り変えること。それだけではだめなんだと。例えば雇用の問題、地域経済の問題、教育の問題、そういったものをト

ータルで改善してこそ地域が活性化する。そういった中で文化がどのような重要な役割を果たすのか、ということにつきましては、途中で触れられましたが、単にイベントをするだけではなくて、いろんな取り組みをすることによって地域のイメージを改善していくと。私たちの第二部で行われますパネルディスカッションの一つのテーマとして、ある時期まで、例えばザンクト・パウリにしましても、ハンブルクの中心部にしましても、非常に汚れていてイメージが悪かったと。それが何をきっかけにして、誰がそれをオーガナイズしてそのような人気のある地区になったのか。これは私個人的に非常に知りたいものでして、そういう面でもどのようなプロセスを経たのか、そしてその中で文化とかイメージの改善というモノがどれくらい大きな役割を果たしたのかということをしてディスカッションをして議論を深めていくことによって、日本におけるまちづくりへのヒントを得られるのではないかと思います。

ということですので、ぜひともご都合がつく限りは午前・午後を通じて出ていただけると、ドイツのまちづくりの概要、特にですね、あ、もう一言説明をさせていただきますと、私たちの共同研究のタイトルは「住み心地がいい」というドイツ語に訳すと **Gemütlichkeit** といいますけども、住み心地がいいというだけではなくて、「住みごたえのある」というそういうような、訳しにくいんですが、そういうキーワードもあります。住みごたえのあるっていうのはどういうことかって言うと、途中でも出てきましたが、モダンであって非常に便利だということの対極に、どちらかというところあるんです。つまり路地で道もくねくねしていてわかりにくいんだけど、逆にその分かりにくさがあるからこそ落ち着いて住める。途中にもキーワードが出てきましたが、そこにやってくるとホッとする。そういうような場所を一方で文化の助けを借りて目指す、あるいは維持していく、改善していくことができるのではないかとということが、今回のプロジェクトの想いとして一方であります。したがって、そのようないろんな要素をいろいろと喋りましたけれども、このような観点から、また午後の九条、そしてザンクト・パウリの事例紹介さらにはパネルディスカッションの中で議論を深めていただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

久堀：それでは、これをもちまして、第一部、「ドイツにおける市民文化に基づく地区更新」を終了したいと思います。続きまして、第2部は13時30分から行います。そちらもよろしく願いいたします。お昼の時間ですが、この会場はこのまま空いてございますが、飲食は禁止となっておりますので、飲食はご遠慮ください。それではこれで一部を終わらせていただきます。ありがとうございました。